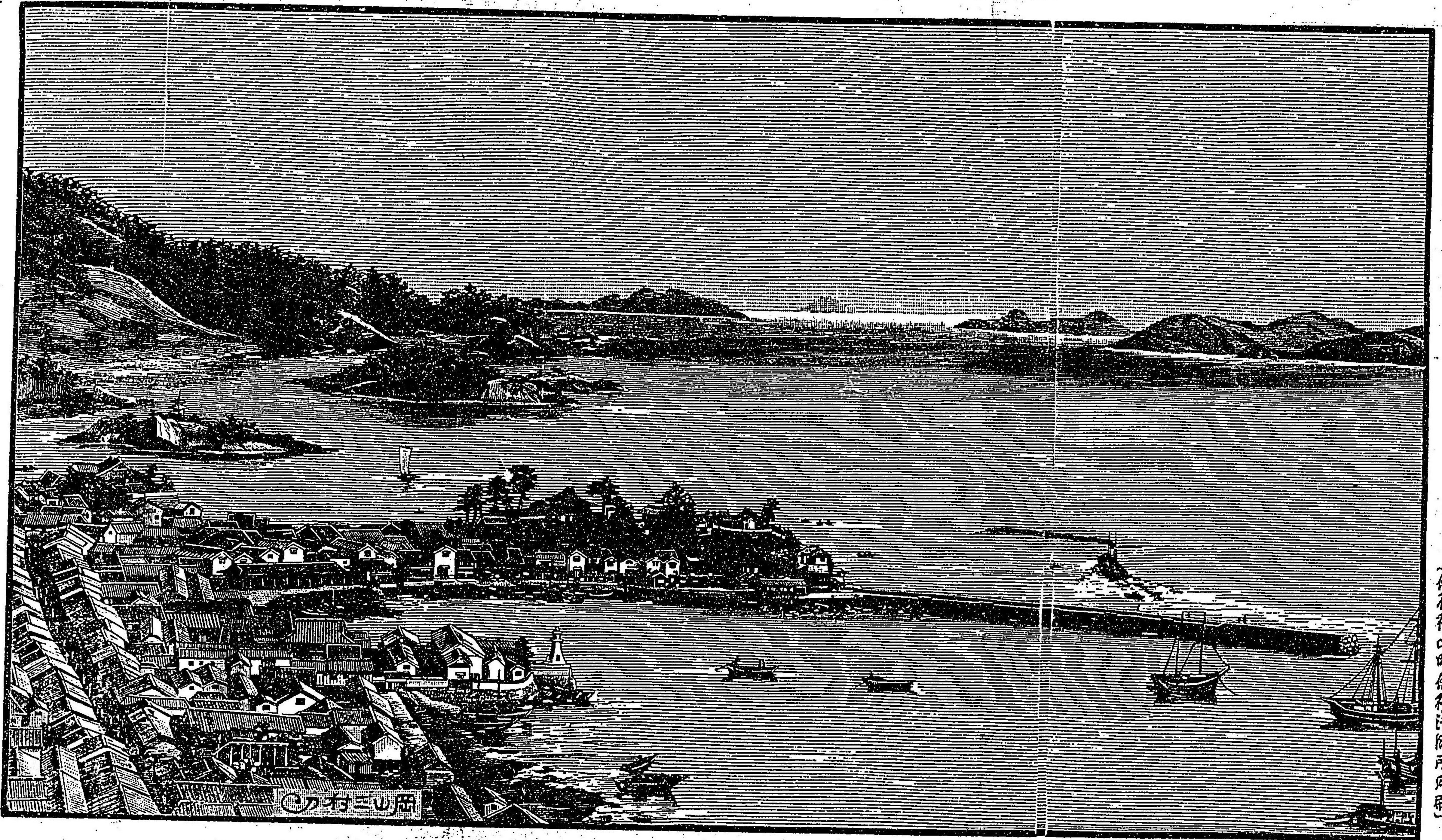


8-84

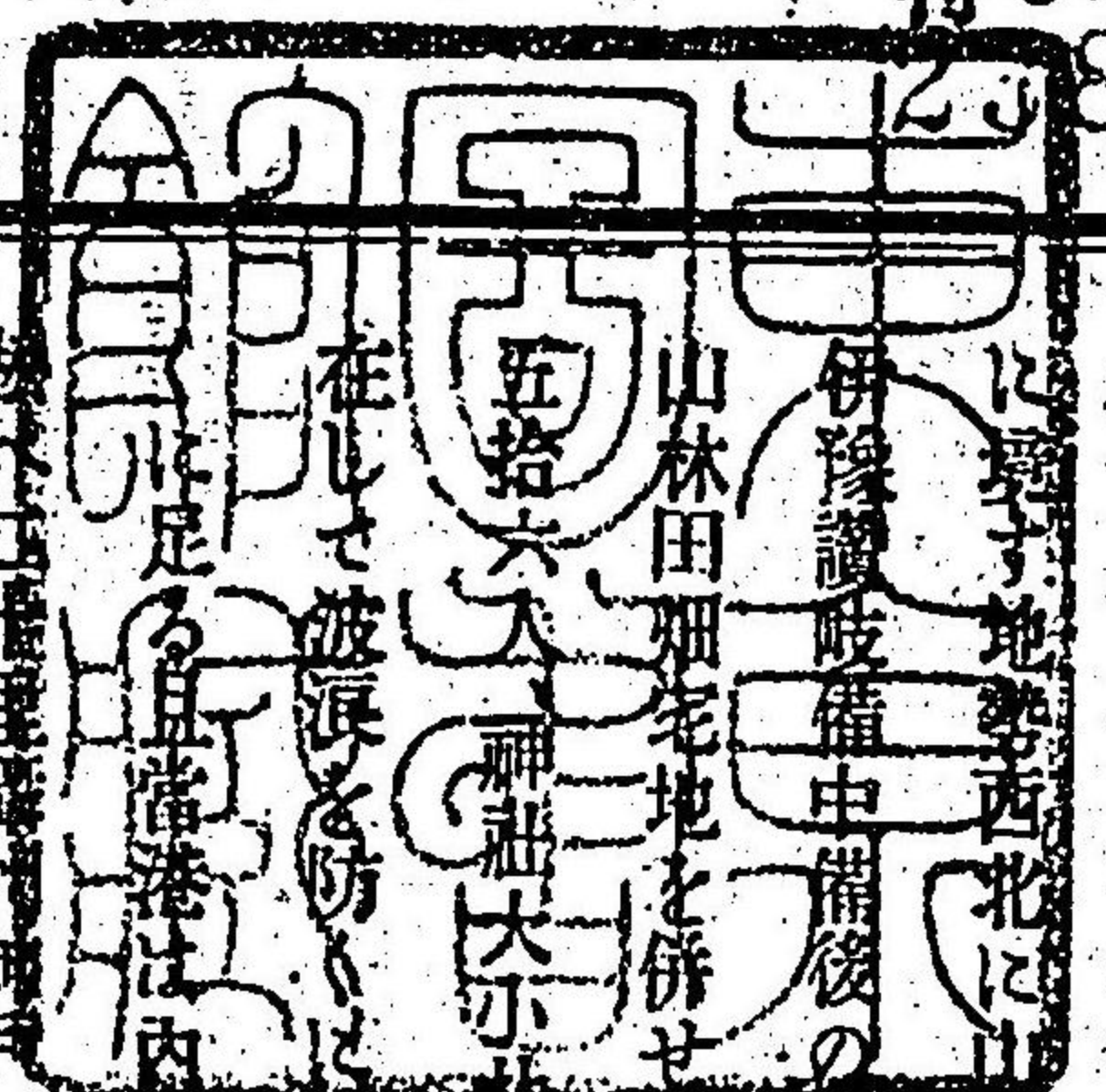
166
582

○ 備後國鞆浦名勝記 完

輦港眞景 醫王寺ヨリ内港ヲ見ルニ



福山町



備後國鞆浦名勝記

鞆は備後國沼隈郡の東南端に位せる海港にして北方深津郡福山

にあり北は沼隈郡田尻村に接し西北は同郡熊野村に隣り西は同郡千早村大字能登原

に接す地勢西北に山嶺を負ひ南西より東北に至る迄悉く海に面し西海遠近の諸島及

伊豫讃岐備中備後の諸峯を望む城内所々に岡陵を起伏し平坦の地に乏しく其面積亦

山林田畑を併せ二百町歩に足らずと雖現在戸數二千四百五拾六戸人口九千貳百

五拾六人神社大小廿一、寺院総て二十六あり港の前面には數箇の小嶼數町の間に散

在りて波浪を防ぐに適し灣の東西には丘岡兩翼となりて突出し以て無數の船舶を繫

舟に足る且備後内海の中心を占め東方備前下津井及讃州金刀比羅へ各十里讃州高

松へ二十五里備前神戶へ五十里を隔て西方備後尾道へ五里讃州忠海へ十里同國廣島及

伊豫高松へ各二十五里長州赤間關へ七十五里を距るの要所にあるを以て推新以前に

在ては播州室津備前兵庫と共に内海の三要港と稱せられ西國諸侯必ずこゝに寄泊し

て居りしに由りて其地を鞆浦と稱す



旅客荷物常に輻輳して頗る殷振を極めたり維新後形勢一變侯伯の來往を絶ち且其地位稍南に偏し陸上の通路に遠きを以て近來著しく鉄道開通の餘響を受け旅客荷物の集散亦昔日の觀にあらすと雖内海航通の漁船帆船日に來往し最も海運に便なり
一
瀬港は其開始甚た古く畏くも人皇十五代 神功皇后三韓御征討の節御船を寄せ給ひたるの靈地にして瀬の稱呼は實に 皇后の命し給ひたる所なりと云ふ今や星霜幾千を閱し記録のこれを傳ふるものなしと雖生土神沼名前神社は式内に列記ある舊社にして 皇后の鎮祭し給ひたる所なりと傳へ現に國幣社たり又皇后島は 皇后の繫船に依りて名つけられ御殿山は行宮の所在に附したる名稱なりと云ひ港内江の浦町には 皇后御西征の時御水主を勤めたるもの、裔なりと傳ふる家ある等徵証歴々各所に存在して 皇后御寄泊の舊蹟たるは疑ひを容れずとす

瀬浦は亦山水の風致頗る秀麗にして至る處觀望に富み其形勝地方に冠絶せり今其一斑を畧述せんに港の東面には仙醉島あり滿山翁鬱として老松を滿たし翠色滴らんと欲するの概あり仙醉の前後より港の西方に至るの間には百貫、躑躅、皇后、玉島、洲上の小嶼葦布し老松の蜿蜒たるあり怪巖の突兀たるあり近くは内海の島嶼其外部に散在して濃淡の彩影を波上に浮へ遠くは豫讀の雲峰髣髴として圍繞し以て漫々たる煙波を畫す其間白帆點々瀾紋を織るあり漁舟漂々翠松を縫ふあり一望快濶眞に是れ一幅の大活畫なり海上より浦邊の風色を弄するも亦好景にして後山は東南に面して港の全景を擁し社寺の屹然たるもの街衢の參差たるもの舟楫の出入するものを前面に集め高戸山は南に向つて燈洋の波濤を迎へ樹陰に漁戸の炊煙を擧ぐるもの羊腸に牧童の戯るゝもの輕舟翺々として遙に欸乃の聲を送るもの或は岸邊絶壁を連ね奇石海中に出沒して悽愴の狀を呈するものを散す一棹に面目を改め一楫に新景を現はす所皆味ふへし殊に其西端阿伏兎岬を突出し岬頭數丈の危巖を直立するの狀に至りては人をして坐るに奇絶快絶を叫はしむ韓客嘗て瀬港を賞するに日東第一形勝を以てし邦人時に阿伏兎を愛して墨繪の山水に似たりと云へり此他雅客の勝景を賦したるも

の敷を知らず左に其二三を録す蓋し亦此浦の景趣を概見するに足らん

萬葉集第七卷

海士小船帆霧張流登見左右荷鞆之浦回二浪立有所見
好去而亦還見大丈夫之手二卷持在鞆之浦回乎

若狹少將九州みちの記

勝 俊

わすれめや霞のひまの浦つたひ漕出る船のとももの浦波

玄旨法印九州道の記

なみりあるつきやともつなみぬとふほ

衆妙集

源 藤 孝

けさはまゑ吹ころをくれあきよせて泊し舟の鞆乃浦風

あくら川

讀人 芝らす

鞆乃浦柳の蔭よほはてしやのにみゆる秋乃はつ風

續松葉集

鞆浦のいろへ乃月をみるのみろはるけき旅乃とり所なる

熊野祠官小中平馬か紀行の中に

範 興

島山のあかねなかめにさのれきて心をほなや鞆の浦ふほ

備中惣社安原氏の紀行の中に

正 卿

逢ふほ乃とももの浦わにうたねして浪に音さく雨の淋し

鞆浦作

宮 利 吉

秋日晴明澄一空、茫々滄海棹歌中、商聲應氣素風冷、歸燕忘時奈此別

石川丈山覆醬集鞆浦夜泊

月落殘星耀、燈來近浦光、梵鐘蒼寒岸、漁艇聚沙傍、席底千尋水、蓬頭一片霜、吾無張
繼思、還厭曉更長、

徂來集菅備後故人鞆浦見月寄懷作

備西城上落秋風、雙鯉方驚下碧空、美爾茲歌舟裡曲、及看明月映丹楓、

獨嘯庵集舟泊朝浦

多載伴狂在世間、今朝杯渡海東還、津頭獨向曾遊處、猶記江中仙醉山、

獨嘯庵集舟泊朝浦

一爲風所阻、千里駐孤槎、異俗留題寺、巨商賣酒家、帆間迷乳燕、橋上集飢鴉、漁者歸

何晚、一聲送遠笳、

日本名勝詩選朝浦別三原安子桓 江村綬

臨岐知爾思難裁、更具扁舟送我來、驚嶼幽莊維鏡上、兎岩悲閣扣舷迴、煙波望隔鄉關

遠、雲樹光園海港開、腸斷日東形勝地、蕭條別意罷含杯、

過朝津 賴惟完

秋海不波隨輕鷗、輕帆一片思悠悠、回看仙醉青山外、擊出觀潮百尺樓、

當港の開始古くして其位置亦要衝に當れること己に記するか如く其形勝の秀麗なる

に至りては實に地方に其比を見ざる所なるを以て舊蹟の尋ねべきもの勝區の訪ふべきもの甚だ多し今其中に就き重なる箇所を列記すること左の如し

國幣小社沼名前神社

祭神 綿津見神 合祀 素盞鳴神 奇稻田姬神 御子等

後山の麓草谷にあり綿津見神は元渡守明神と稱し往古は西町札の辻にありしを慶長年中福島正則麻の谷に遷し貞享年中再び此地に遷座すと云ふ朝町の生土神なり此社は朝町創草の奉祀にして延喜式神明帳に載す所備後十七社の一也福山志料に云ふ其昔 神功皇后三韓を征し給ふ時此浦に於て船具兵具を調へ給ひ朝を用ひて神靈となし海路の安全を祈り給ふ此より地名を朝と稱すと一説に此時 皇后地名を尋ね給ひたるに住民告へて吉備の南海部と奏す 皇后聞てしめし此地に鱧を附けたるに依り鱧と名づくへしと宣ひたり是れ『トモ』の稱呼の濫觴なりと又合祀素盞鳴神は元祇園宮と稱し疫病消除の保護神として近國庶民の崇仰最も厚く日夕參拜の人絶ふること

なし社殿元關町にありしを 淳和天皇の天長年中此地に遷し奉ると云ふ（或は云ふ保元年中に奉祀すと）維新後兩社を合祀し渡守神社の舊殿は攝社として尙境内に存せり備後第一の大社にして境内廣く樹木茂り所々に末社及附属建物あり本殿及前殿は明治十八年に修築せし所にして規模最も莊嚴なり

海岸山福禪寺

眞言宗京都大覺寺末寺

東南の丘岡上にあり縁起に依るに此寺は人皇六十一代 村上天皇の勅願所にして天皇の妃明子は沼隈郡の長者新莊太郎の息女なるを以て妃故郷懐かしく此に觀音堂を建てんことを願はれ天曆六年壬子空也上人に詔して建立せしめ給ふ所なりと云ふ永祿の頃火災に罹り堂塔烏有に歸し慶長十五年法印榮高再建して今に至る客館を對潮樓と稱す前面に百貫の小嶼仙醉の全景を控へ南西燧洋の諸島を挿んで遙に讚豫の連峯を望み東北方備中の島嶼を瞰下す風景佳絶なり寛永十五年嵯峨大覺寺二品法親

王此所に成らせられ勝景を愛して直末とし給ふ又幕政の頃は朝鮮修信使の旅館に充て其來往には諸侯をして此樓に饗せしむるを恒例とす蓋し亦風色の佳なるに依る正徳元年辛卯秋韓使李南岡此樓の勝景を嘆賞して日東第一形勝と扁額し其後寛延元年戊辰の秋韓使洪啓禱對潮樓の三字を題す此より名聲大に現はれ文人隨客の歴訪するもの續々踵を接す左に其吟咏二三を録して景趣を知るの便に供す

大谷光尊

朝夕乃潮にむらへるたのものは都にまき忍見る然なりけり

題對潮樓

西成齋

對潮樓外畫清和、諸島如星拱補陀、知是嘗登韓使者、日東煙景此臺多、

登對潮樓作

中谷宗明

西溪爲客日、一倚對潮樓、鏡裡晴千障、欄前渺四州、觀濤偏賦興、送雁忽鄉愁、不堪斜陽盡、上方明月秋、

寄題福禪寺對潮樓

梁田邦鼎

潮浦之濱有梵臺、東南吞海望雄哉、四州潮湧雲生樞、三備天開月照杯、願客停舟摘藻盛、高僧揮塵雨花催、無由到此仙炊境、夢繞滄溟勞數回、

題福禪寺閣

赤松鴻

高閣登臨無限情、漫遊遲暮嘆虛生、回頭便欲題名字、滿目風煙畫不成、

登對潮樓

林章達

對潮樓下水漫々、形勝千年稱大觀、海濶名區遠遼近、天遙征帆映峯巒、廣陵濤逐斜陽落、牛渚雲懸片月寒、坐愛風光隨處變、數州盡入掌中看、

同

壽恒

秋海高樓勢自雄、欄頭徒倚望何窮、東來仙嶋晴堪畫、南畔鵬溟晚更空、幾點雲帆漁唱外、十方天籟梵音中、幸吾此地懸孤錫、時有詩儔吟酌同、

對潮樓

菅晉帥

評品江山人不同、傍觀遠客眼應公、望着朱棟懸天半、來見蒼崑插水中、島嶼斷連松石影、雲濤豁達帆檣風、休言邦俗誇鄉土、果爾靈區甲大東、

登對潮樓

門田重隣

沈醉飛欄俯海灣、長風萬里拂吾顏、寒裳蹴踏千層浪、舉手摩挲四國山、壁上名篇輕楚夢、津頭大艦雜洋蠻、當年韓使評形勝、亦道斯樓冠九寰、

辛卯歲除日東槎歸客次唐律韻題于福禪寺曾於重九日過此故篇中及之

朝鮮國從事通訓大夫弘文館校理知制教兼經筵侍讀李邦彥南岡

海畔昭曠百尺臺、寺門高傍白雲開、寒潮極浦煙光淡、返照遙山雪色來、落帽曾成佳節飲、歸帆猶趁舊年回、天涯此日真堪惜、強舉樽前柏酒杯、

辛卯除夕平泉題于福禪寺

曾於重陽日過此結句及之

朝鮮國正使通政大夫參議知制教趙泰億平泉

縹緲魚頭最上臺、入窓簾箔倚天開、煙生極浦斜暉歛、雪罷遙山霽色來、海內幾人能此

會、天涯遠客得重廻、秋風不盡登高興、又醉新年柏酒杯、

辛卯除夕東幹靖庵題

朝鮮國副使通政大夫弘文館典翰知制教任守幹靖庵

天涯歲盡客登臺、大海遙山極浦開、征櫓曾隨秋月過、歸帆今逐夕陽來、空洲石出潮初落、絕域春生雁欲回、賴有諸公同此會、不妨終夜罄深杯、

福禪寺樓次杜工部韻

朝鮮國通信正使濟高走寫

前輩乘槎至、人々說此緣、海低何所極、樹老與同浮、孤月留我客、千燈繫群舟、鐘鳴猶未起、河漢已西流、

題寺樓

朝鮮副使竹裡稿

東南形勝地、第一此高樓、浩々天無阻、飄々岸欲浮、長風吹素月、孤燭繫歸舟、半夜清虛界、新秋又火流、

桃林山醫王寺

真言宗沼隈郡草戸村明王院末寺

市街の西方後山の麓にあり天長年中僧空海の創にして享祿年中僧真永の中興せる所なりと云ふ眺望極めて佳なり鞆町の地形たる中央に城山の丘陵ありて東西間の遮障となり一望全景を捕捉する能はず獨り此寺は山腹の高處に位せるを以て港の内外を問はず海の遠近に拘はらず悉く眼下に望了し頗る壯觀なり福山の儒門田重隣此觀望を稱へて十勝の詩を作る左の如し

鞆津醫王寺十勝

門田重隣

海底出日

東海日將升、下方人未興、劈波光上照、寺在白雲層、

山門櫻花

山門櫻幾樹、遙映海中天、知自海中望、春光滿萬船、

月下涼舫

不用追涼去、海風來滿樓、下方人苦熱、爭放月前舟、

泉水全景

世有醫王寺、世無泉水山、山呈全景到、寺始甲人寰、

菘洲曉霧

咫尺菘洲曉、模糊水霧連、數帆來隱見、商舶定官船、

白石釣船

白石洲皆石、居人海作田、漁舟散如葉、亂点夕陽邊、

又

海底多巖石、其魚不可網、一舟三四竿、時見尺鱸上、

走島夕虹

波浪浮孤島、搖々欲走行、使誰釘得固、日暮彩虹橫、

燧洋打魚

朝漁紅棘蟹、晚捕馬鮫魚、一日千金利、燧洋天下無、

豫山晴雪

豫峯秋後雪、玉立到殘春、何料富山外、別雄南海濱、

天邊帆影

帆影天邊白、相追萬里風、乾坤同一碧、憑水訝憑空、

城 山

町の中央に位せる丘陵にして東西六十間南北四十間餘あり町内丘陵中の最高なるもの
とす此地は慶長年中福島正則の築きたる城趾にして藩政の頃累代奉行職の邸宅を
丘下に構へ庶民の出入を許さざりしを以て其形勝廣く人口に膾炙せすと雖四面鞆町
を瞰下し遠景亦映し來りて其眺望敢て福禪寺醫王寺に譲らす目下鞆小學校を丘上に
建築し外觀亦可なり

登鞆津古城山新樓

門田重隆

新搆何人鏗古丘、荊榛變引綺羅遊、遙山淡在秋雲外、宿雨徐開暮檻頭、諸勝最佳泉水
嶋、大觀寧讓對潮樓、吾來亦欲忘歸去、不待纖々素手留、

津人片山子亭求名於新樓用前韻

全人

人死賢愚貉一丘、有身只合此來遊、風流不在携紅袖、山水何曾厭白頭、實與對潮同好
景、誰揮彩筆壯新樓、岳陽記裏大觀宇、宜向楣間揭得留、

要害

(一名大可島)

福禪寺の南方に獨立せる小丘にして周圍二丁五十間ありこれを新港の東南端とす丘
上佛刹あり圓福寺と云ふ慶長年中の創立にして南林山と号し眞言宗明王院の末寺な
り此丘元島地にして北方福禪寺に通ずる所四所あり道越町と稱すこれ海峽を築立て
たる所にして往古は此間阻礁をなし大潮の際潮の礁上を往來せしに依り滿越と稱せ
しなりと云ふ此丘亦觀望自在にして福禪寺に亞くの眺めあり左の二首能く此地の眞
景を穿つを以てこれを録す

題圓福寺

惠旭 京都五智山僧

壁立百尋岸、危樓勢欲飛、山聲螺髻美、海疊翠羅奇、樹老明神島、嶺隣天女崎、漁舟
浪歌、終々始知非、

丙午初秋過圓福寺之作

廣樹栢岩

八面蒼波別有天、幻成精舍好安禪、白雲借宿爲何事、玉笛橫吹送客船、

此地は曆應年中金谷經氏小松寺の足利勢と對陣したることあり亦貞治年中足利直冬
の據守したる城趾なり

瑞雲山安國寺

臨濟宗京部妙心寺末寺

俗に大寺と云ふ港の東北原町にあり新浦志に依るに 光明天皇曆應中諸國に安國寺
を建つ此れ當國の安國寺にして曆應二年足利尊氏の建つる所慶長四年毛利輝元再興
殺生禁制の地とすと云ふ境内地藏堂あり朝鮮征伐の時釜山浦より持歸りたる石像を

安置す又釋迦堂あり名匠左甚五郎作なりと傳ふこれに安置せる釋迦の古像甚奇にして他に類例を見ず又此寺に足利尊氏の位牌あり長壽院殿仁山義公大居士と書す

萬年山小松寺

臨濟宗當町安國寺の塔中

沼名前神社の右側下にあり平重盛の創建なりとも云ひ安國寺六世の住持曇叟花の開基なりとも云ふ六郡志に依るに天長年中祇園社を此地に遷す迄は社地も此寺の境内なりしと云ふ元大地たりしもの如し足利尊氏九州より入寇の時此の寺に陣し曆應年中又足利勢の占據せしことある等數回の戦亂に境内荒廢に歸し舊記寺寶悉く紛失せしよじにて創造の年度等これを攷ふるに由なし現今の境地は延寶三年住僧大川なるもの破荒を修めて後世に遺したる所なりと云ふ境内老松一株あり御手植の松と稱す枝幹蟠延頗る古雅なり傳へ云ふ小松重盛の植ふる所なりと又寛文の頃薩州の士根治丹波なる者重盛の牌を拜し疎忽なりとて新彫寄附したるものあり面に小松寺殿贈

一品内大臣淨蓮尊儀とあり又重盛牛身の像あり小松内大臣重盛入道淨蓮と記す又寺内琉球人道亨の墓あり道亨は琉球貢使の從臣なりと云ふ

小鳥神社

鍛冶町にあり三條小鍛冶を祭ると云ふ六郡志に神体は太刀の折れたるにて小鳥の銘ありと云ふ此邊戸々悉く鍛冶を業とし往古は刀劍の鍛鍊に従事したるものありたる由なれとも近古以來専ら碓及釘を産す其碓は此地の名産なり

對仙醉樓

福禪寺の北朝町の東岸の市街を關町と云ふ町の賈人上杉某代々酒及酢の醸造を業とし優品を出す〔現今酒の醸造を廢す〕其酢は實に當町の一名産たり其門樓仙醉に面し勝景宛も福禪寺の眺めに似たりこれを對仙醉樓と稱す古今の雅人其勝を傳へて杖を曳くもの多く亦朝浦の一勝區に属す

因に云ふ對僊醉樓記中三島怡齋とあるは上杉氏の先代にして嘗て憚る所ありて

其氏を三島と呼べり云ふ

對僊醉樓記

朝之勝甲於三備、其所謂對潮樓、至韓客題爲日東第一、而津上人家往々有樓可登、余歸省過備後、朝人三島怡齋、要余求記其家樓、々在對潮少北、望亦不多讓、蓋朝之景勝、以仙醉山爲主、山容秀麗、望之類然如天僊醉將眠狀、山與津市對、左右各成一灣、舟帆往來、遠近島嶼皆揖遜此山以爲趣、而樓正當其面、余因名以對仙醉、主人家業醜、性亦喜飲、齡僅過強、而託家其子、與其歡伴日夕酒飲、不復省塵務、余之來見、樓前釀器雜陳、自其上望山、如迎山而醉之者、予笑謂之曰、僊醉々子之酒耶、子醉仙醉之色也、子晨起望之、東灣之日蒸山而升、如紅玉膚者、山之卯飲也、晚來望之、西灣之霞注射屏顏色成紫金者、山之暮醉也、至如烟雨空濛鬢亂眉黛則、山之宿醉未解也、而子亦不能不對之引滿焉、則子之醉非徒醉、對僊醉而醉、々而醒、々而復醉、擅領秀氣養我天和、與仙醉爭壽、醉其有限哉、主人咲曰、是吾願也、又舉一大白、從而浮余、々不甚解飲、

亦強爲之醕大醉而書、

文化甲戌冬十月既望、山陽外吏賴斐子成、撰并書於靱津對僊醉樓上山紫水明處、

旭莊廣瀨謙

靈境自古推蓬萊、雲霞恍惚海上開、秦皇夢寐求何急、徐福童艸往不回、仙家怕接虎狼國、肉眼敢見金銀臺、我邦開關多神聖、下視華胥等與儗、東海元距仙都近、彼聞慕我不待媒、黃微洲尾靱浦首、蓬山一夕此飛來、山姿自與諸山異、喬松萬本擁紫翠、綠波蕩漾洗塵埃、青苔白石更明媚、雨過色似醉而醒、霞抹狀如醉而睡、所以呼爲仙醉山、勝槩孤絕世無二、芙蓉雖云峻極天、若欲相見應遙避、維嶽降神生甫申、此山比嵩更有神、乃知元氣所磅礴、宜與 昭代生偉人、 杉翁母乃其人也、家蓄醪醴萬斛春、高樓百尺元龍漢、珊瑚一笑王愷貧、妙舞掌中趙飛燕、彩衣天上石麒麟、日與仙醉相對醉、赤松巨喬若姻親、今歲甲子一周矣、今後不知華甲幾周新、不窺不崩豈待道、仙山咫尺是前身、壽詞至今多平俗、況我鴻爪歸期促、 君藏詩文悉名家、從來不許狗尾續、借

問鸞飛鳳階餘、翰音上天何所告、馬馱佛經有佛緣、蠶蝨仙字上仙籙。君家儼興勝淮
南、縱爲雞犬吾願足、預計後來周甲期、此般干支須細錄、嘉永第五壬子年、對仙醉樓
主人屬、

對仙醉樓歌和廣瀨吉甫韻

鎮兜學人越羅

仙醉山比古蓬萊、十洲之外一洲開、松生竹植年何限、汐去潮來日幾回、雨餘屐氣象城
闕、月中桂影現樓臺、海岸白華稱奇絕、持向此際是興懷、我欲振衣遊仙去、弱水一阻
歎無媒、大歲甲寅 帝正月、漁查借便載吾來、巢鶴養雛丹頂異、海光相映皓衣翠、古
廟設位祭水僊、寶妝如花自明媚、行帆曳影片雲懸、浮巖戩翼一鷗睡、奇文剝盡秦代碑、
僅求完字無一二、或傳樓船終不還、徐市三千爰來避、覽古彷徨午至申、坐覺江山助有
神、日落下崖轉槎去、樓前停棹訪主々、人々日傾葡萄綠、坐對烟波浩蕩春、老健鮑亭
天上福、開曠敢說世間貧、膾手擊鮮金潑刺、不數羨鳳與地嬰、餘霞湖面山亦駝、樓上
樓外對相親、仙醉之上今猶古、僊醉之樓舊維新、樓兮山兮豈窮極、支持一係主人身、

留客徵詩事不俗、其奈束裝期已促、大航引滿鯨吸波、神正旺時筆相續、思主再三反傷
眞、蒙之豕日初筆告、所喜書生賤姓名、得繫君家長生籙、不知今日是何遊、登山登樓
仙福足、一篇三百六十言、字無定體任手錄、海內椽筆數晨星、今後期題向誰囑、

賴 山陽

重醉君家儼醉樓、醉仙一遊伴誰遊、依然仙醉山頭月、湧得金波樓外流、

保命酒屋の濱

納津の名産數種ありと雖其最も廣く世間に知られ此地に来るもの必ずこれを購はさ
るなさは所謂保命酒なり酒舖は港内に突出せる築地にあり此處元岨礁にして岨中潮
水を涌出せしに依り涌出岨と名つけしか後築調して家居を設けたるなりと云ふ故に
其本名は涌出町又は涌出濱と稱すれども世人保命酒屋の濱と稱へて其本名を呼ぶも
のなし以て此酒か如何に世人の稱讚を博せるかを知るに足らん

三條公修

異國乃外まで名よをなかきたるくすりの酒はたきくまららん

千種有功

あつぎややしき乃外にひききたる朝のうま酒のすまららん

太政大臣三條實美

とよならずともこの港の竹の葉をのくてもなむるも珍らしの世や

季鷹

人みな乃よはひ延てふうま酒乃名は四方八方にかをれさり鳥

梅室

舌鼓やほをやのめや保命酒

蒼虬

夏返けのゆぬ氣よなゆやくはま酒

頼襄

余數往還山陽海灣、如朝津其數繫泊、每見粉壁玲瓏映發海波、認是中村氏也、家業釀

醞、如保命養氣諸名酒、著稱遠近、至漢蘭琉球諸蕃購求齋歸、誇詭珍奇、方法精善可

知也、余亦海泊得嘗啜焉、美而不甜、冽而不醜、覺洗滌磊塊、爲主人錄酒品于扁遂記、

古賀侗葦

朝港芳醇天下聞、留客無日不醺二、羞予小家漫評酒、何異簪幪談錦文、

梁川星巖

數年流寓地相隣、頗識君家麴米醇、千里寄來江府暮、一尊重對朝津春、花前携去興應

甚、燈火管來眉已伸、欲賦小詩酬厚貺、醉吟掉脫老烏巾、

朝鮮 滄洲

生國堂前玉醴清、御方釀得幾金甌、三盃能掃千愁去、藥長豈空保命名

明神山

港の西南に突出せる小丘にして大可島と相對して港の両翼たり市街西方の連橋茲に

盡き西を大字後地宇平組と云ふ丘上樹木生茂し中に小祠あり淀姫明神と云ふ即ち平組の生土神なり祭神は罔象女神なり或は云ふ 神功皇后の妹姫を祭るなりと此地亦海面の眺望よし

三 名

明神山の西方平組の道側に三個の石あり傳へ云ふ往古星の下りたることあり其跡を闕して此三個を得たり依て此近傍を星の浦と名つくと又云ふ此石に腰を掛くるときは必ず病に罹ると蓋し隕石の類ならんか

部 山

明神山の北方能登原への通路を能登原坂と稱へ其近傍の丘陵を部山と云ふ名所なれども今は満目畑地となれり此處足利義昭の居趾なりと傳ふ又沼名前神社の南より南禪坊と稱する寺の後邊を草谷と稱す此地元公所谷と書し義昭の從臣の居趾に名つけれる名なりと云ふ福山志料に依るに備後國中部山と名つくる所三所あり一は深津郡

深津村、一は出雲境なる高野山にあるもの及ひ是れなり而して義昭の住跡は深津村の部山なりと云ふ果して然るにや

散木集

俊 頼

部山の傍はかろせとほていさす聲はかくきぬを乃よりあがきほ

後堀川百首

常 陸

部山おぬはゆらしはぞしに柴のどほりものぞぬおぬる歌

六帖

俊 頼

部山ゆらしの風のはなげれはさるもまら葉をたぬ人ぞなれ

權中納言家頼集

まてみ山をたてた禮を月影のあまりあかさはをきて見ろけは

續松葉集

天乃戸の明でもくはたまとも山をるはゆらしに木の葉ふるらし

百貫島

周田二丁四十間仙醉島と要害との海峡に浮へる小嶼にして形状龜に類し島上に老松二三を起臥し中に辨財天の小祠を顯はす處宛然池中の一假山の如し辨財天の祠畔に十一重の石塔あり頼浦志に云ふ往古近江國人某船を此地に寄せ誤て太刀を海中に落し蠻人を募り錢百貫を出して拾上げしむ塔は此蠻人の爲めに建つる所島名亦これに基くなりと又明人沈惟敬の碑あり慶長年中惟敬歸國の途こゝに立寄り自ら紀念としたるものなりと云ふ

玉島

港の坤位四丁の處にあり周田四丁三十四間東に向ふて防風堤を突出し港の安全に供す島上に玉津島の小祠あり故に又玉津島と云ふ島の近傍河豚多し故に元『フクシヤ』と稱せしを福島正則備後を領せし時今の名に改むと云ふ

洲上島

『スガル』と呼ぶ港の西方九丁の所にあり周田四丁三十七間島の東部少しく離れて巖石直立し其間堀割の如し

躑躅島

仙醉島の東にあり周田四丁四十間陸上よりは見へす往昔此近傍に夥多の筆具を産せしよしにて左の詠あり然れども今甚た希れなり

烏丸亞相光榮

世とほさぬ海を硯の佛に寫はば筆てふ貝やおふらん

法橋保悟

空ら波よ心をとせてひろひしはたのむ筆やふかひもころあき

伊藤長胤

珠宮龍女案頭筆、何日化來産海瀛、千歳葆眞方不禿、毛穎翰却仰長生、

休三峠

鞆港西方の山を高戸山と云ふ山腹能登原に通する道徑あり其最高の處休み峠と稱し眺望佳なり此處大松一株あり扇松と云ひ其南の海濱を扇ヶ浦といふ

室野

鞆港の西方半里程の所を狐崎と稱し其西方の海濱二區に分れ西を室濱と云ひ東を小室濱と稱す往古大なる天木香樹ありしと云ふ所謂磯の室の木の名所なり一説に往古は關町より百貫鳥近傍迄廣野にして茲に天香樹ありたりと云ふものあれども蓋し妄説なり諸書に徴するに今の市井の所より少しく隔たりたること明なれば今の室濱にありしこと疑ひなし

萬葉集第三天平二年太宰帥大伴卿向京上道之時過鞆浦日作歌三首

吾妹子之見師鞆浦之天木香樹者常世有跡見之人曾奈吉

鞆浦之磯之室木將見每相見之妹者將所忘八方

磯上丹根寔室木見之人乎何在登問者語將告可

萬葉集第十五道新羅使人等乘船入海路上作歌八首の内

波奈禮蘇爾多底流牟漏能木宇多我多毛比左之伎時乎須疑爾家流香母

之麻思久母比等利安里宇流毛能爾安禮也之麻能牟漏能木波奈禮天安流良武

鎌倉右大臣家集

實朝公

みささるるいぢへみ立る室の木之えゑもと茂りに雪うはをさる

新撰六帖第二

爲宗

梓弓いろへに立るむらの木のとまとはにやは鞆のうらなみ

名寄

行能

鞆のうらに人もすさめぬ室の木のいゑはらにのみ年をへにける

夫木集三十五

源仲業

鞆乃浦乃浪ち遙に漕船乃るかひにみゆる磯乃室乃木

現存和歌六帖

藤原隆祐

ひろの木の常盤にくらた島陰をなみのよるとはいふへのりぎと

太宰帥大伴卿

年経ある朝の浦人あてはむ幾世よかむし磯の室の木

桂雲集松久友といふ題にて 長 孝

ゆくどしの朝のうらなるひろの木もえやは常盤の松にまされる

秋寐覺 讀人不知

旅ねして月はかりころともものうらのいろの室野にわけぬ此よわ

阿伏兔岬

室濱の西一帯の地沼隈郡千年村大字能登原に属す斷崖絶壁相連り奇石海中に出没するの状甚妙なり其悉くる所一岬角あり名つけて阿伏兔と云ふ岬頭佛刹あり盤壘寺と云ふ海潮山と号し臨濟宗京都妙心寺の末寺毛利輝元の創建する所なり岬端海洋に面するの處危巖兀兀として聳る直下數丈あり上に堂宇を建設し大悲閣と名つけ觀音像

を安置す其狀頗る奇なり隱者露心なるもの、道の記に此近傍の風色を叙すること甚た詳なり即左の如し

露心道の記

朝のうらやあふとの興は末晴て月に吹なり秋の初風

阿伏兔の山は北より東さほにはけり南は前はれわたりて雲むにまかふたきつじらなみなんとよみぬへきやうなり向路の遠くみゆる西の方より嶋近くならひて入江めぐり興津舟の行も歸るも折にきたるひ涙をしつた風を待わて出る舟入ふねみるもつれくならず

先急つもおくるも同じ出ふ糸のいつれ湊に繫きはつへた
とつ、けて左右の岸のさまを譬は二枚屏風のうらにけんろに出る墨繪の山水を見るの如しこれは本を末とし末我本とすといは、末を以て本をあらはしたとへを以て譬とする也山は似屏風と詩にも作きり蝶つゝひの程に岸をはなきて飛出たるや

うに岩はさかしく立上れりうの長十丈計のいたゝきに御堂氣高く南に向はせ給ひて慈尊御坐す昔のむせる岩係のさしに生たる松の枝たれし様いかてか述ん惜夜の月をひとりうななか免つる思はぬ磯に浪枕してとよ免りしになぢらへ思ふへし寺はこめたの岸の北山かけ靜にして御堂へ登るには石のささ橋の根に次第の係りにして廊下つたひなりこなたの谷より霞むはかりに上り橋をかけて橋下にうつるやうにまつらひてうのさゑもぬはれすれかし云々(下略)

観音の石像は天正の頃海中に得たりと云ふ此寺韓使來聘の時は餉米菓子紙等のものを献すること毎例なりしよし韻士の頼浦に遊ふもの騒人のこゝを過くるもの亦必ず來訪せざるなく其名聲世に高し左に其遊詠の二三を録す

自夜船撰阿部戸観音

石川山材

岩下横船既欲登、山房寂々似無僧、星光一點落波底、便是観音堂裏燈、

同

林道春

同

菅玄同

孤岸雖高將一登、南方無垢白衣僧、金沙鎖骨馬郎婦、滄海捧珠龍女燈、

二十年前我亦登、當時遺恨久吟僧、舊遊如夢雙蓬背、獨對菱花愧自燈、

阿伏兎山禮石大土

醉竹老人

遠渡游龍海、初登伏兎山、清波天影像、大土石容顏、隨湖出津底、爲燈照世間、行舟眞利涉、擊鏡日躋攀、

無名氏

煙波三萬頃、翠壁百餘尋、勝景冠天下、大悲觀世音、

阿浮圖

學真和尚

玲瓏寒月影如珠、南海龍雲夜有無、夢斷鐘聲何處所、燈懸岸上一浮圖、

月夜舟中望阿伏兎観音閣

秋儀号玉山肥後人

大悲高閣海之濤、磴道盤回易夕陰、經罷兎岸明月上、帆過牛渚碧流深、雲霞終染珊瑚

色、爐氣偏饒簷葡林、爲是時、龍女至、諸天仙梵雜潮音、

三日登伏兔大悲閣

寰海禪師

百尺盤臺伏兔岑、永和三日此登臨、慈航晴泛桃花水、華雨春深簷葡林、波撼龍宮知淨界、風吹仙梵雜潮音、人間禩事非關我、觀世時忘五濁心、

乙未仲秋

朝鮮人

仙聲鳴時杳鷲生、琳宮高處霽雲平、梵音遙散鼇頭迥、禪夢長遊象外清、槎客素多遺世趣、山人寔有出塵情、危欄百尺看如唇、笙鶴依稀落玉京、

口無泊

阿伏兔より西方の海北は千年村一帯の土地を繞らし南は田島を以て圍み數里の海面潮水穩にして風浪を遮ぐるに妙なり其東西の灣口甚だ狭くして已に内海に入れば出入の口を見出す能はず四方山を繞らし宛も湖中に在るの感あり古來口無の泊と云ふ俊賴家集に

口なしのとまりとさけは身にしみていひもやらぬ物をこそ思へ

此邊風景幽邃にして左右兩岸に敷名の泊、千年の藤、矢筈島其他の名勝古蹟尋ぬべきもの多し敷名には元番所ありて保元平治の頃より海上の關所たり往昔俊寛成經等流刑の節も茲に繫船したりと云ふ又千年の藤は後白河院御通輦の際勅命ありて折らせられたる古蹟にして村名亦茲に基く歌に

源 通親

千とせへむ君のかさしのふちなみは松の枝にもかゝるなりけり

大納言隆季

千とせへむ君かよはひに藤浪のまつのおたにもかゝりぬるかな

又矢筈島は周圍六丁餘あり田島の属島にして北方能登島に面する所総て竹篠を滿らし最も矢筈に適す其對岸能登原に一基の古松あり能登守弓掛けの松と稱す枝條蜿蜒として四方に蔓り其高さ地上數尺を出てす傳へ云ふ平教經此處を據守するるとき嘗て

強弩を此島に試みたるに其矢芽根を生して生々し遂に矢筈島と名つくるに至りたり
と松は其際弓を掛けたる所にして地名の能登原と稱する亦教經の古蹟なるが故なり
と云ふ其後水野勝成島原陣の首途此島に泊し左の一首を詠せり
武士の矢筈にかゝるかといては矢の跡つさせぬいくさなり島

蓑島

瀬港より北方海陸共に一里程を隔て風呂ヶ端と云ふ處あり元和の頃領主水野勝成浴
場を此地に設け宿禰を療せし古蹟なり近來亦海水浴場を設け夏時優遊の處とす此處
より舟行半里蓑島と名つくる處に達す此地古來 神武天皇を奉祀す其由來を尋ぬる
に此地は古事記に載す所 天皇御東征の節行宮を建て給ひある高島の地なるに由る
と云ふ考証種々あり一説に備中高島を以て行宮の古蹟に擬するものあれども其當を
得ずと云ふ歴史家の宜しく査討すへき所なるべし又此地に狸々の手を藏するものあ
り朝鮮役の節持歸りたるものなりと云ふ

燧洋及水島洋

瀬浦の南海讃豫に至るの間西を燧洋と云ひ東を水島洋と稱す大小數百の島嶼洋中に
散在し且潮水穩靜なるを以て魚族の生長に宜しく諸魚の産卵期に臨むもの皆茲に臻
り至る就中鯛及鱒は此海の名産なり漁法種々ありと雖其構造の大なるものを鯛網及
鱒網とす立夏の頃網を卸し小暑に至つて止む漁期凡六十日なり一網を曳くに數艘の
漁船と數十の漁夫を以てし多きは一網にして數万尾を擧ぐ其觀頗る壯なり遠近酒を
載せてこれを見るもの多し菅信卿觀網記能く其實相を詳述す依て左に掲ぐ

鯛呼曰汰緋形似鯛而扁紅銀金鱗海味之最美者也、或謂、異國尚海所產鱖魚即是、
本邦沿海之州所在有之、而獨我三備爲尤盛、手島、繩島、日比、大島、備前白真鏡、黑土、
北樹、鹽飽、水島、備中舞島、白石、袴島、當木、砥浦、備後諸島自出者皆佳、就中我州
味濁浮鯛者極奇品、古昔爲貢物云、蓋此地在裡海中央、爲潮汐分道之地、波穩水甘、以
故凡魚之産此者、肥美異於他州、夫鯛四時有之、最以春月櫻樹花開爲之候、故又有櫻

鯛之名、土人稱、鯛以季春產于洋中、波濤洶涌不宜跌子也、以故百千為隊而來、以裡海為宅也、方此時漁人網而捕之、甚為偉觀也、余曩與友人泛舟于白石島觀之、白石西岸之下、有二漁舟、相並載一巨罔、舟人數十輩如有所待、遙瞰海面、有一小艇、分道划到、艇上二孺更相向而坐、各如手有所操、余始不解其為何事、問之舟人、曰、此其將下罔也、先牽長索于海底、以感魚、索繫小板數片、觸水成聲、魚駭避而聚一處云、二艇漸近、橋岸下二舟忽東首並進、稍出里許、振槳西首、舟首各一人取繩下之、二舟相分夾海而來、每舟二十餘櫂、汗手爭盪、其疾如風、瞬息達岸、凡設大罔于裡海者、必據島嶼、遮海之三面以截魚路、網之綱繫木桶數百箇、令不得沈、圍繞海面纍々如連珠、蓋唐詩、有長罔橫江遮紫鱗、及截江一擁數百鱗之句、恐亦與我無異也、四舟憑岸呼噪挽網、愈挽愈急、繼以旋輪、將舉網亂棒擲海、嗚榔雷轟、警魚之逃逸也、已而四舟環合、以舉其罔、罔底數千頭、如一團霞彩自海心涌出、其小者二三尺、大者四五尺、紫色者、金色者、淡紅色者、燕支色者、背點青斑者、頂戴黑鬚者、亂跳閃日、燦然眩目、漁人倚舷、爭拾投之舟底、

底著海水養魚也、始舍之魚多翻白、漁人針之即蘇、一舟簸旗以進、表其大獲也、觀者攙手逼之、糯酒以賀、漁人亦酬以鯛數頭、魚皆活潑撥刺、如不可掣者、斫而上俎、轟而切之、肉如淡脂、片片尚動、味尤脆美、如咬冰玉、若夫日沒處、天子以松江鱸魚為金齏玉脍、東南佳味、蓋不知更有如此者也、夫鯛烹治之方極多、浴而酢焉、炒而油焉、為酢、為麪、為串、身無焦痕、鬚尾如生者、為鮓煨、膏脂沸椀、生暈成珠者為潮羹、其它有筍肉尊液、椒紅葱白、又助之、不獨觀覽之興、口腹之快亦極矣、以故每天晴風和之日、觀漁之舟、無往無之、有載琴尊詩筆焉者、有載妖童舞伎焉者、有載博奕雜戲焉者、實海鄉之一勝事也、庚戌之冬月、偶讀辨髮漢、汪琬黃魚詩、因有思往事、遂記、

水島舟中

菅 晉帥

播磨以西江面狹、島嶼百千布其中、大連檣嶽小棋點、或稠或稀闢麗容、官船買舶雜漁艇、來去如織路四通、我曾六遊鳳凰城、每載琴劍向水程、帆風泊雨窮變態、坐月立雪恣

賞情、濁酒可賒魚可買、最折四時波浪平、方壺圓嶠事空聞、五湖三江津未問、且近移居
向此間、撈蝦射鴨作隱淪、何人能拋榮願去、浮家長此結佳隣、

物産

新町の物産は保命酒、梅酒、菊酒、忍冬酒、清酒、生酢、錠、釘、各種漁網、船具、帆木綿、鯛、鱈
其他の鮮魚、鯛子其他各種鹽辛、干鱈子、乾鰯、乾鱈、其他乾魚類花蕨等なり

備後國鞆浦名勝記畢

明治二十八年四月二十四日印刷
明治二十八年四月二十九日發行

編輯者 箱田半三郎

廣島縣深津郡福山町
字東町四百卅五番邸

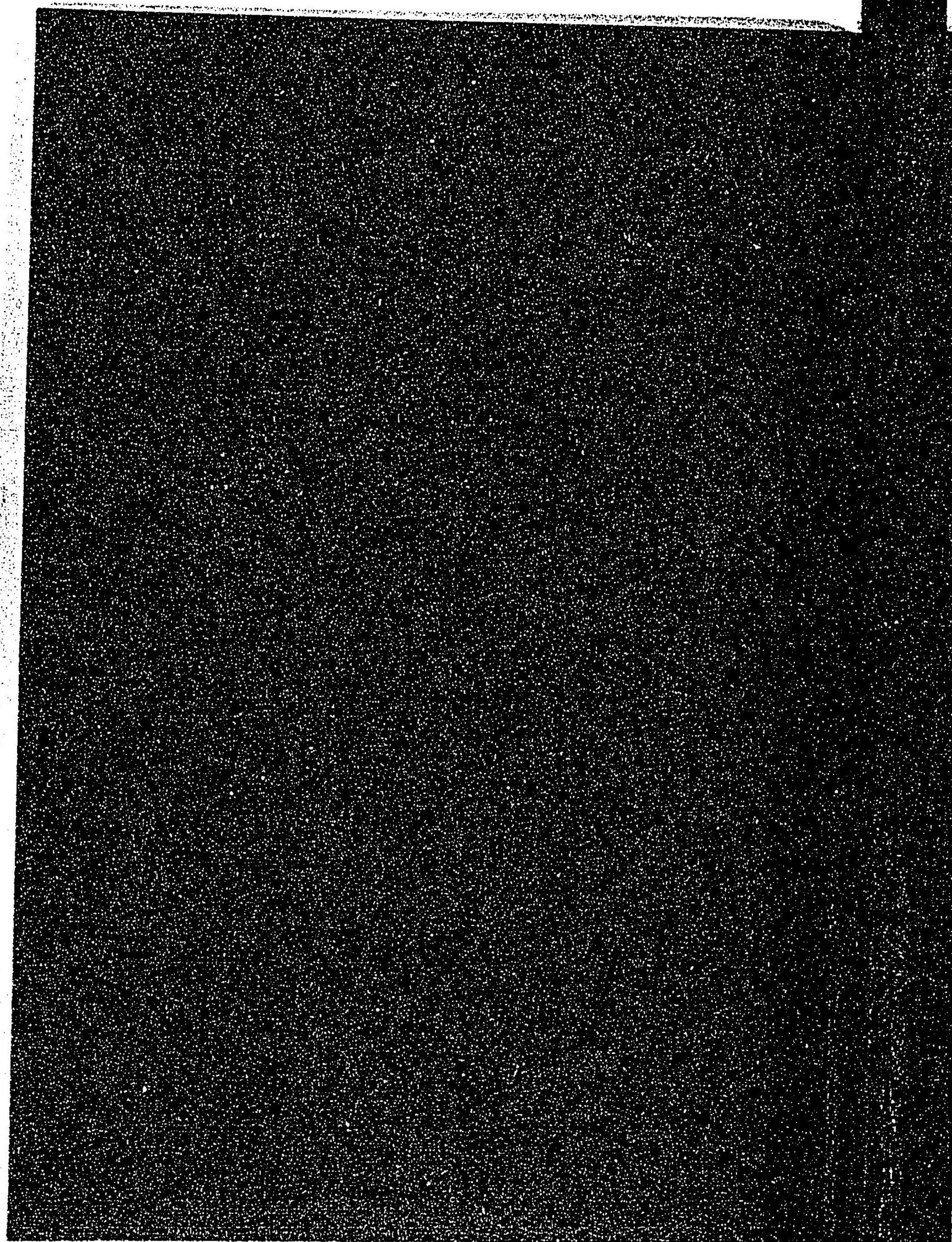
發行者 土肥晉四郎

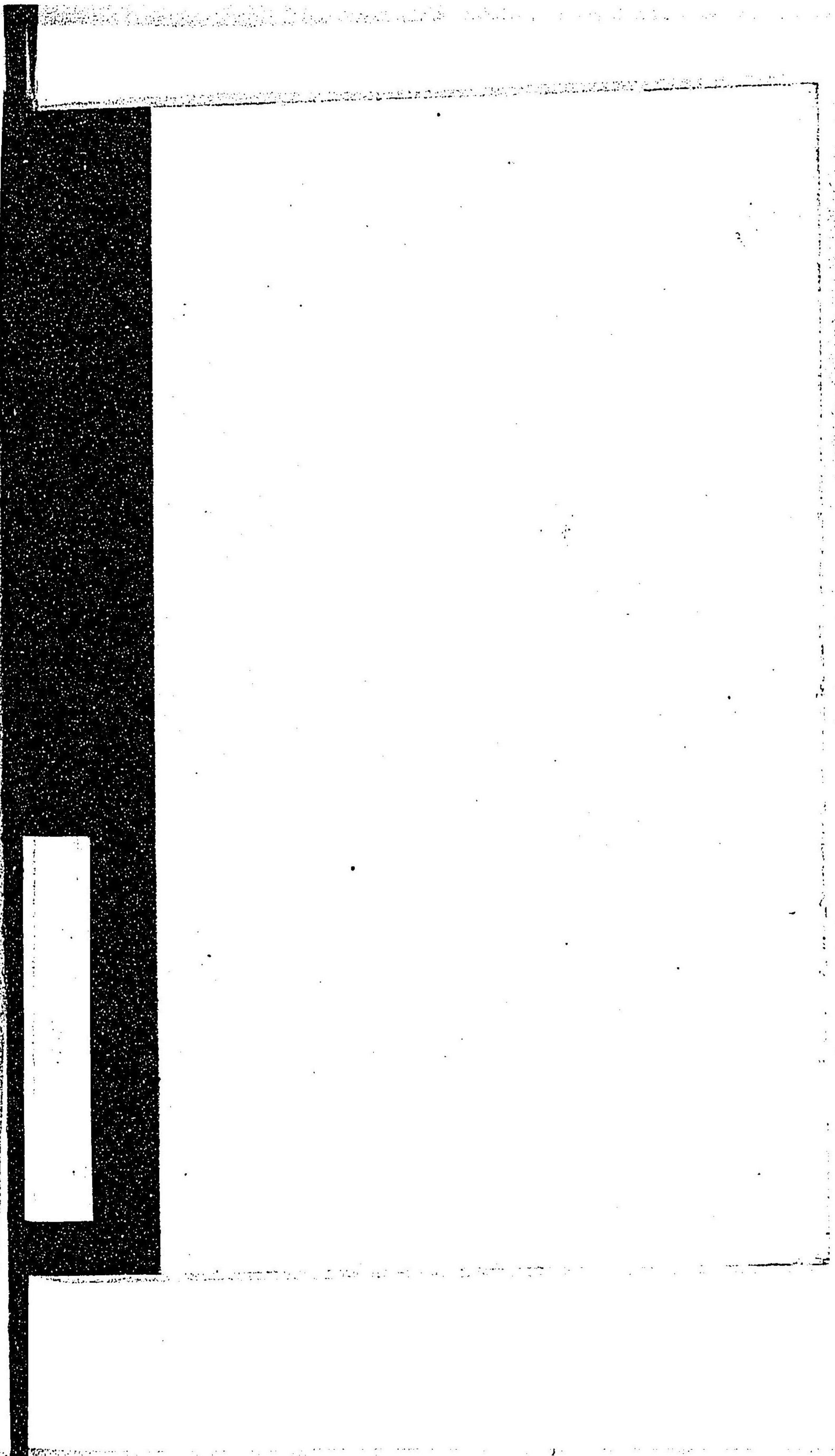
廣島縣沼隈郡鞆町
字鞆千二百廿六番邸

印刷者 岡田軌道

廣島縣深津郡福山町
字東町貳百卅九番邸

7-10





特 52

238

備後国鞆浦名勝記

国立国会図書館

025982-000-9

特 52-238

備後国鞆浦名勝記

箱田 半三郎 / 編

M28

ADC-3568

